イラスト：みつはしあやこ

『うつし世の静寂に』映画会

しじま

自然との共生という「おごり」ではなく、その営みに人がまず身を委ねる。

令和５年 4月 22日 土

17：00〜19：10 (16:30 開場)

秋田市文化創造館 スタジオB (2F)

定員30名　入場料: 無料

1．映画上映（アカデミック版）／60分
2．10分休憩
3．シネマセッション ／60分

聞き手：石倉敏明
秋田公立美術大学アーツ＆ルーツ
専攻准教授【芸術人類学、神話学】

ゲスト：由井 英（映画監督）
小倉美恵子（制作・作家「オオカミの護符」）

○ 2010年完成作品　○ 制作助成：公益財団法人トヨタ財団　○ 取材地：神奈川県川崎市　○ 主なシーン：「念仏講」、「巡り地蔵」、「谷戸」の風土、「初山獅子舞」

お申し込み／お問い合わせ

フォーム、もしくはメールアドレスより、お名前、人数、
御連絡先を記入の上、お申し込みください。

◆ 入力フォーム：https://forms.gle/KADWwzqM9Gd3yvHj9
◆ E-mail：utsushiyo78@gmail.com　「うつし世の静寂に」映画会主催：長谷山宛

SASALA PRODUCTION

「映画へのコメント」 裏へ

✤ 映画に寄せられたコメント

（2010年当時）

「わからない世界」と付き合いながら生きてきた人々が「わかるという錯覚を抱いた世界」に移行したのが近代、現代という歴史。だけど今、科学的な分析をいくらやっても「人間とは何か」はわからないということに人々が気づき始めた時代でもある。

内山 節｜哲学者

何度も涙が込み上げてきそうになりましてね…。この映画のテーマは“祈り”だと思います。講や祭りの「むこう側」にある“祈り”も含めて、時間軸と空間の歴史の全体像が見えたような気がしました。

田中優子｜江戸学者、法政大学教授

この映画は、むしろ若い人に見てほしいと思います。もしかしたら理解しづらいところ、気持ちが咀嚼できないところがあるかもしれません。でも、この映画を観たという記憶は、今後の人生でさまざまな体験をしたときによみがえり、その本当の意味を知るきっかけになると思います。

皆川 明｜「ミナ ペルホネン」デザイナー

日本ではよく伝統的な文化は無くなったと言うけど、コップに半分入っている水を「半分しかない」と見るのか、「半分もある」と見るのか。まだまだ日本には昔からの文化が伝えてらていると私は信じているので、この映画を見るとそういう姿を身の回りで探したくなるのです。

ジェフリー・アイリッシュ｜ノンフィクションライター

講を通じての地域の結びつきが戦争に利用される。それが戦後、地域そのものを解体してしまったのではないか。それが過ちであることに再び気がついて、いま、日本各地でもう一度地域の結びつきが見直されているという、そういうメッセージがあるような気がしました。

平川 南｜国立歴史民俗博物館 館長

様々な行事に一緒に参加させてもらっているなという位置にカメラがポジションをとっている。外側から見ているのではなくて、まるで「こちらから入って撮って良いよ」という位置から撮影している。この映画は人とのつながりをきちんと築いてから作られていると感じますね。

覚 和歌子｜詩人